

2025年9月14日 礼拝説教要旨

ヨハネによる福音書講解説教52「自分をごまかすな」

ホセア10：1～2、ヨハネ9：13～23

先週はシロアムの奇跡の話でした。今日はその続きになります。人々はイエスさまによって癒された人をファリサイ派の人たちのところへ連れて行きました。その理由は記されておりませんが、おそらくこの不思議な出来事の意味を知りたいと思ったのでしょう。生まれつき見えな人が見えるようになった。この驚くべき出来事が神さまの御業なのかどうか確かめようとしたのです。

今日のところには、わたしたちが信仰に導かれていく過程が示されているように思います。わたしたちはどのように救いに目が開かれ、信仰へと導かれていくのでしょうか。最初、この人は目が見えませんでした。信仰はまだありません。けれどもイエスさまがその人と関わりを始めてくださいました。そして生まれつき見えない状態から救ってくださいました。でもそれはまだ肉体の癒しだけでした。ですからまだ本当にはイエスさまが見えていません。自分に触ってください方が誰なのか気づいていません。それゆえ人々から「その人はどこにいるのか」と問われても「知りません」としか答えられませんでした（12節）。

ところが、今日のところでファリサイ派の人たちに「お前はあの人をどう思うのか」と問われた時に、「あの方は預言者です」（17節）と答えました。預言者とは神さまの言葉を語る務めを託された人のことです。イエスさまが誰なのか少しずつ見えてくる。預言者かもしれない。そしてそれはやがて「主よ、信じます」（38節）という信仰告白へ至ります。興味深いのは、今日読みましたところに、「イエスをメシアであると公に言い表す者がいれば、会堂から追放すると決めていたのである」（22節）とあります。「公に言い表す」という言葉は「ホモロゲーセン」という言葉ですが、信仰告白を意味する重要な言葉です。それが最後の「主よ、信じます」という部分に結びついていきます。しかし、このようにイエスさまをメシア、キリストであるという信仰告白をすることによって会堂を追放される。信仰に至るまでには試練を経るのです。ファリサイ派の人たちによる尋問も、この人の両親の態度もまたそれはこの人にとって大きな試練でした。

ユダヤ人たちは、この見えるようになった人の両親を呼び出します。本当に生まれつき見えなかったのかを両親に確かめようとしているのです。でも両親は答えて言いました「これがわたしどもの息子で、生まれつき目が見えなかったことは知っています。しかし、どうして今、目が見えるようになったかは、分かりません。だれが目を開けてくれたのかも、わたしどもは分かりません。本人にお聞きください。もう大人ですから、自分のことは自分で話すでしょう」（20～22節）どうして息子の目が見えるようになったのか。両親はおそらく知っていたでしょう。イエスさまが目を開いてくださったこと。しかし両親は証言を避けたのです。「本人にお聞きください。もう大人ですから、自分のことは自分で話すでしょう」なぜこう言ったのか、その理由も書いてあります。「ユダヤ人たちを恐れていた」つまりイエスさまが見えるようにしてくださったと証言したら、それを神さまの御業と認めることになり、イエスさまをメシアと言い表すことになるのではないか。そうなると会堂から追放される。それは単に会堂から追い出されるということではなく、イスラエルの共同体から追放されることを意味しました。両親はそれを恐れたのです。それで証言を避けたのです。保身のために、口をつぐむ。都合が悪い

と、自分は関係ないという責任逃れのようなことをする。たとえ親子であっても、自分はこの人とは違う。そこに線を引くのです。

わたしたちは自分にとって都合が悪くなると感じると、関係を断つようなことをします。自分に厄介なことが降りかからないように距離を置く。あるいは世間体などを気にして、あの人とは付き合わない方がいい。そうやって離れていく。「もう大人ですから、自分のことは自分で」都合が悪くなると、そうやって線を引いて、わたしたちはますます孤立していくのではないのでしょうか。

説教の準備の中で、加藤常明先生の説教集を読んでおりましたら、高倉徳太郎の話がありました。高倉徳太郎は『福音的キリスト教』という代表的な本を書いています。高倉は京都の綾部の出身で東大の法学部に行きますが、稀に見る秀才、郷土の誇りとして送り出されます。しかし富士見町教会に出席するようになり、植村正久の説教を聞いて洗礼へと導かれます。その後、大学を中退して、東京神学社、これは東神大の前身になりますが、神学校に入り伝道者を目指すのです。そのことを知った父親が電報を打った。「オヤヲコロスカ」高倉はこの電報にこう打ち返す。「オヤハコノタメニシネ」と。加藤先生はよく知られたエピソードと書いていましたが、わたしは初めて知りまして軽いショックを受けました。親子の絆が断ち切られる。しかも信仰において親子の間に断絶が起こる。お互いどういう気持ちでこの電報を打ったのか。この後、高倉は親との関係を修復することができたのかは分かりません。

自分に正直に生きるために、大切な何かを捨てる。犠牲にする。特に信仰においては、そういう戦いがあるかもしれません。皆さんの中でもそういう戦いをして信仰を貫いてきたという人もいるかもしれない。それこそ家を出るような覚悟で信仰を持つという人もいるのです。決して綺麗事ではすまない。そこには明確に線が引かれる。この息子はその後読んでいきますと、会堂を追放されるのです。「彼らは、『お前は全く罪の中に生まれたのに、我々に教えようというのか』と言い返し、彼を外に追い出した」（34節）それで両親は自分たちを守ったかもしれませんが。でも息子は捨てられた。息子は親を捨てた。わたしたちが信仰に生きるために、自分をごまかさずに生きるために、何かが犠牲になる。痛みがあるのです。

このことが最後に行き着くところはイエスさまです。イエスさまが全てを担いご自身を犠牲にしてくださったからこそ、わたしたちは自分をごまかさずに生きることができるのではないのでしょうか。わたしたちが「主よ、信じます」と告白する、その背後にイエスさまの犠牲、十字架の罪の贖いがあることを覚えましょう。都合が悪くなると線を引く、その線乗り越えてイエスさまがわたしたちのところに来てくださった。そしてそのように誰かを切り捨てていく罪を担われご自身が切り捨てられた。このイエスさまの犠牲があるからこそ、わたしたちはイエスさまを信じることができるのです。

天の父よ。不器用なわたしたちです。だからこそイエスさまが犠牲になってくださいました。その犠牲によってわたしたちは自分をごまかさずに、まっすぐに信仰に生きることができます。その恵みを覚えさせてください。主の御名によって祈ります。アーメン。